

平成15年度 神戸大学農学部3年次編入学試験問題  
小論文(生物環境制御学科)

1 つぎの文章を読んで、あとの問に答えなさい。

「文化」というと、すぐ芸術、美術、文学や学術といったものを頭に思い浮かべる人が多い。農作物や農業などは「文化圏」の外の存在として認識される。しかし文化という外国語のものは、英語で「カルチャー」、ドイツ語で「クルツール」の訳語である。この語のものと意味は、いうまでもなく「耕す」ことである。地を耕して作物を育てること、これが文化の原義である。

これが日本語になると、もっぱら「心を耕す」方面ばかり考えられて、はじめの意味がきれいに忘れられて、枝先の花である芸術や学問の意味の方が重視されてしまった。しかし、根を忘れて花だけを見ている文化観は、根無し草に等しい。

文化の出発点が耕すことであるという認識は、世界の学会が数百年にわたり、世界各地の未開社会に接触し調査した結果、あるいは考古学的研究、あるいは書齋における思索などを総合した結論である。人類の文化が、農耕段階にはいるとともに、急激に大発展を起こしてきたことは、まぎれもない事実である。その重要性をよくよく認識すれば、「カルチャー」という言葉で「文化」を代表させる態度は賢明であるといえよう。

人類はかつて猿であった時代から、毎日食べ続けてきて、原子力を利用するようになった現代までやってきた。その間に経過した時間は数千年でなく、万年単位の長さである。また、その膨大な年月の間、人間の活動、労働の主力は、つねに、毎日の食べ物の獲得におかれてきたことは疑う余地のない事実である。近代文明が高度の文化の花を開かせた国においても、食物生産に全労働量の過半を必要とした時代は、ついこの間までの状態であった、とはいえないか？

人類は、戦争のためよりも、宗教儀礼のためよりも、芸術や学問のためよりも、食べるものを生み出す農業のために、一番多くの汗を流してきた。現代とて、やはり農業のために流す汗が、全世界的に見れば、最も多いであろう。(中略)

農業を文化としてとらえてみると、そこには驚くばかりの現象が満ちみちている。ちょうど宗教が生きている文化現象であるように、農業はもちろん生きている文化であって、死体ではない。いや、農業は生きているどころではなく、人間がそれによって生存している文化である。消費する文化でなく、農業は生産する文化である。

(以下略)

(中尾佐助 著、「栽培植物と農耕の起源」、岩波書店 より引用)

問1. 上の文章の大意を100字以内で述べなさい。

問2. 筆者は下線部で「農業を文化としてとらえてみると、そこには驚くばかりの現象が満ちみちている」と述べている。このような視点に立つと、技術や道具だけでなく、農業を取り巻く動物、植物、微生物などは農業文化の重要な一員であるのとらえることができる。このような生物の中には、人間に多大の利益をもたらすものもあれば、害を及ぼすものもあるが、いずれも人間の営みと切っても切れない関係になっている。これらの生物について、人間生活とどのように深く関わっているのか具体的な例を1つあげて詳しく解説しなさい。